

短歌春秋

136号

目次 ● 2015年10月

秀歌を読もう

松尾祥子

特集 短歌大会講演・報告

金沢市短歌大会

対談 岡井隆×穂村弘

岡井隆 わたしの短歌史―その強さと弱さの魅力

伊香保短歌大会

対談 小池光×花山多佳子

歌の歳時記―日常の不思議・おかしみを詠む

金沢市・伊香保・那智勝浦短歌大会の各賞

連載

万葉の紐を解く三

上野 誠

短歌の技法 基本のき(7)

伊藤一彦

リレーエッセイ 琴の糸と短歌

金子正男

26

24

22

20

11

2

受講者作品

秀歌鑑賞

誌上添削(入門・実作)

安部洋子

久々湊盈子・大原葉子

30

28

ご案内

春の誌上短歌大会のご案内

NHK全国短歌大会のご案内

44

48

● 選者・講師の新歌集

中川佐和子

34

● 歌だより

小橋美沙世

36

● 受講者の歌集

黒木三千代

37

● 短歌質問箱

黒木三千代

38

● NHK短歌

39

● 受講者のみなさまへ

40

● あなたの声

42

今月の表紙画



池田 松蓮

NHK 学園

俳画講座専任講師

コスモス。メキシコ原産のキク科の花
だそうです。陽気なラテン系のイメージ
のメキシコで生まれたコスモスは、日本
では秋桜とも呼ばれています。意外だと
思いませんか。
杖をつく母の歩幅や小六月

受講者のうた……裏表紙

岡井隆 わたしの短歌史

—その強さと弱さの魅力—

岡井隆×穂村弘

穂村 岡井隆さんは昭和二十一年にアララギ入会で、「わたしの短歌史」と言ってもとても長くて、それを全部聞くことはとうてい無理ですから、重要そうなところを抜き出しながら、と思っています。

私にとって岡井さんは、言葉の魔術師のような存在です。岡井さんが言葉に触ると、その言葉が特別な深みを持つというか、言葉の味わいが深くなるんです。それがとても不思議で、岡井さんだけがその魔術を使える、そういうイメージです。今日は「その強さと弱

さの魅力」という不思議な副題です。ご存知

のように岡井さんは、青春期から塚本邦雄さんたちと一緒に前衛短歌運動を進められて、当時を知る方は、今でも岡井さんを見るとビクツとするくらい、強い猛将という感じだったようです。僕が知ったのは、六十歳代以降の岡井さんなので、とても穏やかで優しい岡井さんです。

岡井 本当は優しい人なんだがなあ（笑）。

穂村 若いときに作られた作品で、「土地よ、痛みを負え」という、一九六一年に出された

歌集からです。

仮説をたて仮説をたてて追いつく、しげざらざる髪も炎え立つ

岡井さんはお医者さんでもあったので、これは医学の研究のことを詠っているんじゃないかと思いました。その研究の過程でいろいろな仮説を立てて追いついている。髪をとかす暇もなく……。 「炎え立つ」って、ライオンみたいになるのかな。

岡井 そうですね。これは医学の研究をやっているときですね。

穂村 普通にこの歌の状況を読むと、「不精だ」となる。だけどこの歌、ものすごくかっこいいんですね。まるで、心理を追究する魂が髪の毛を逆立てた、みたいな、そんなふう

に読めるんです。なぜ岡井さんが短歌を作る

とかっこよくなるのか。

岡井 私自身としては思い出のある歌です。

五、六人の人間が狭いお粗末な研究室の中で、ある病気について、どうすればそれを叩くことができるかと、毎日話し合いをしながら研究を進めているわけです。世界中の文献がどんどん集まってきました。「多分あそこは、AからBにいつている。だからAとBは関係があるんだ」というような仮説を立てるのですが、その仮説がだめな場合は、「あの仮説は間違っていたんだ。じゃあAからCという考え方に変えようじゃないか」と、毎日論議しながらやっていくわけです。研究室の中の人は誰一人として髪の毛をなでつけている人なんていない。昭和で言うと三十年代かな。

穂村 歌集「鶯卵亭」の歌を見てみましょう。こちらは打って変わってプライベートな歌だと思えます。

泣き喚ぶ手紙を読みみてのほり来し屋上は聞きなきたに聞

行ったんだね。真つ暗だった。「さなきだに聞」というのは、心境的な問題、状況的な問題で、自分はもう真つ暗な状況で生きている。それに追っかけてこういう手紙をもらって、弱っちゃうんだよなあ……と。

穂村 僕は、こんなに激しい手紙をもらったことがないので、岡井さんが羨ましいなと思うのです。

泣き喚ぶ手紙」って、これはやっぱり、恋愛に関するものじゃないか。その手紙に、何かものすごく悲痛な叫びのようなものがあるもっている。読んだほうは心が激しく動揺する。そして、呆然として屋上へ上ると辺りはもう真つ暗な闇。ここで「さなきだに」という、「もともと」とか「そうでなくとも暗い場所なのに」というような意味のちよつと古い言葉を使っている。ラブレターの歌で合っているでしょうか。

岡井 そうですね。私的にはいくらでも説明できるけれど、それをする必要はありません。ある客観的な情景で、泣き叫ぶような、多分、女の人のだろうけれど、手紙をもらって読む。そして、このときは病院の屋上に

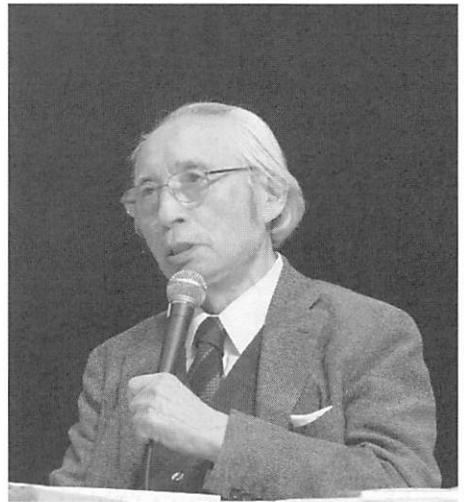
岡井 いやあ、もう、絶対にそんなことはないほうが幸福ですよ。うーん、辛いよ(笑)。

穂村 でも、その心の濃さみたいなものが「さなきだに聞」という言葉を引き出すのかなと。

岡井 そうですね。これは、歌の作り方としては「のほり来し」というのがやや文語調で「屋上は聞」というところまでは割合普通の言葉ですが、「さなきだに」という文語が入ってくる。これはどういう意味だったかなと辞書を引きたくなるような、そういう謎っぽい言葉が入っているところが、今読むと面白いね。

穂村 「さなきだに聞」というところにすごくひきつけられる歌ですね。

穂村 僕には、そこまで何かを追究したという記憶がなくて、気圧されるんです。



魂から引き出されてくる言葉

飛ぶ雪の確氷をすぎて昏みゆくいま紛れなき男のころ

穂村 これは、電車でしようか車でしようか、何か乗り物に乗っている。

岡井 バスです。スキーに行つてその帰り。

穂村 なるほど。確氷峠ですよね？

岡井 そうです。

穂村 外は雪が降り頻つていて徐々に暗く

なつていく。そのとき、外が暗く沈んでいくのと反比例するように、自分の中の男の心が急に浮かび上がる。

岡井 そうそう。

穂村 岡井さんは「昏い」というこの字が好きですね。

岡井 そうですね。「昏々」というような。

穂村 普通の「暗い」よりもこっちの字のほうが……。

岡井 どういう漢字を使うか。さっきの「さ

なきだに」のような言葉を使うか使わないか、こういう好みというのは人によって違う

んだろうけど、全体を口語調でわかりやすくやっているとこころへ、そういう言葉を入れる。

「暗」を使わないで「昏」という字を使つてみた。ちよつと暗さが違うといつとこ

ろを出したがるんだね（笑）。辞書を引いてご覧なさい。「くらい」というところに、い

ろいろな字が並んでいる。「暗」という字だけを使うんじゃもつたない。そういう言葉

選びの機会というの、短歌のかなり大事な部分だと思つているのだけど、どうですか？

穂村 歌つて言葉がすべてなんだけど、言葉だけじゃないような不思議なところがありま

す。僕が「いま紛れなき男のころ」という下の句を使えるかという、とても使えないです。

岡井 時代かな。

穂村 いやあ、時代もそうだけれど、泣き叫ぶ手紙を読んで、真つ暗な所で軋むような心

を持つている岡井さんだから、「紛れなき男のころ」と詠える。思想とか宗教とか、職

業とか恋愛とかで、魂を問われるような局面に、岡井さんはそのつど立つてこられたので

しょうね。

岡井 そうですね。ばか正直と言えばばか正直なんだけれど、対面するんだね。

穂村 歌会始に行かれたときも、思想的なものを激しく批判されたことがありますね。

岡井 僕が出てくるといじめたくなる人がいるらしいんだな。いじめているほうは楽しそうだよ。こちらは辛いけど。

穂村 岡井さんはそういうとき、どんな気持ちなんですか？

岡井 僕はね、思想変換を充分に行つてきて、しかもその理由をずっと歌の上でまた文章で発表してきています。僕のことを非難し

ている人は、それをろくろく読みもしない

で、ただ「あいつは名誉職を欲しがってそっちに行った、けしからん奴だ」と言っている。根本的、思想的な意味では相手の言っていることが間違っているわけだから、結局、あんまりこたえなかったね。

シンボリックな存在として

穂村 ひとつひとつのそういうことを、岡井さんはみんなに見られている。岡井さん、次はどうするんだろうと。原発のときもそうだったし。



岡井 僕が前面にいてやられていますから、その後の人たちが非常にすんなりとそっちに行っているじゃないですか。そういうった意味から言うと、一種の一里塚のようなものをこちらが作ったとも言える。原発もそう。

原発については、どう考えても僕が正しいし、今でもそう思っているんだけど、今さら言ってみたって仕方がないと思うんだよね。

穂村 ひとつひとつ旗幟鮮明にしないで、なんとなくスルーしてしまおうとは思わないんですか？

岡井 思わないんだね。損な性質と言えば損な性質で、そうすると向こうは、待ってましたと手榴弾を投げつけてくるわけです。自分のことをほめるつもりはまったくなくて、偶然が作ったんだと思うけど、時代ってそういう人が一人くらいいて、そういう意味ではきつとシンボリックな存在なんだね。時代時代の曲がり角で、「こっちだよ」と言ったんだけど、叱られちゃって（笑）。だけど結局、あのとき、ああいうふうに言っておいて良かったかなという感じはするんだよね。

穂村 その魂を問われるような経験の蓄積が、やっぱり岡井さんの言葉に反映されている

るなど、僕はとても感じるのです。次の「人生の視える場所」の歌もそうです。

おほぞら
蒼穹は蜜かたむけてあたりけり時こそ
はわがしづけき伴侶

この下の句のかっこよさですよ。時間の中で生きているのは岡井さんだけじゃなくて、ここにいる全員が時間から自由になっていないんだけど、じゃあ、誰もが「時こそはわがしづけき伴侶」と詠えるのかというと、詠うことができない。言葉を思いつかないというだけじゃなくて、そこまで一瞬一瞬の時間にきちんと立ち向かってきていないんです。年譜で調べると、これは私くらいの年齢のときの歌です。衝撃を受けました。とてもこんなことは言えないな、と。

岡井 要するに、時間の経過とともに自分自身は「蒼穹は蜜かたむけてあたりけり」というような情景で慰められてきた。実は、その前にもものすごい涙ながらのことがあったんだけれど、ある時間——十年経つと、こんなに静かになり得るのかなという体験だね。それを言ったただけのことだから内容はともかくと

して、そういう上の句と下の句の対応という、短歌のひとつの型を作ったわけです。上が情景で下が抒情という二つを合わせた、短歌の根本的な詠い方のひとつだね。その重さが同じくらいだとどちらかが消えたりするんだけど、この歌の場合、どちらかというところの句のほうが濃くて重くて、下の句「時こそわがしげき伴侶」のほうが静かな。それで多少、良かったんだろうね。

穂村 「おほぞら」も「蒼穹」と特殊な字を使われています。

岡井 さっきの「昏」と一緒です。僕はその頃、自家用車に乗っていました。田舎住まいだから車がなくなっちゃだめなんですね。それで、木曾路をずっと上がっていく。信州に入る手前で、目の前に大空が見えて、「蜜かたむけてあたりけり」と言いたくなるようなひとつの光の雲があったというだけのことなんです。ひとつひとつの歌に、そういう個人的な気持ちはありますが、そんなものはどこかに飛んじやって、こうなつてくると、別にどこだつてかまわないわけです。

「弱い岡井隆」が現れる歌

穂村 この辺りの歌までは、間違はなく「強い岡井隆」という感じでしようか。強くてかつこいい時代と言うんでしょうか。この次くらいから少しずつ、岡井さんは弱くなっていくんですね。いつも思うのですが、塚本邦雄さんは最後まで帝王のように強かったですね。

岡井 そう、強かったね。

穂村 それに対して岡井さんは「弱い岡井隆」という新たな境地をどんどん開拓する。これはすごく勇気がいるように思います。岡井さんの中に、そういう迷いとか矛盾、ためらいとか弱さというようなものは、もともとあったのですか？

岡井 もともとあつても、作品の上には出しにくかったんでしょうね。弱さ、あるいは迷い、そういうものは、出せそうな感じがしても割と平凡になっちゃうのかな。

穂村 岡井さんご自身が選ばれた歌は「親和力」の中の歌ですね。

額田郡にんじん村はほそき雨逢ひたくて来て逢はず帰りぬ

今まで見てきた歌に比べて、作中の私像が大分違いますよね。違いたくて来て逢わないで帰っちゃう。これは、韻律的にも「いま紛れなき」とか「時こそわが」のような、踏み込んでいくものではありませんね。

岡井 そうですね。これは文語調に見えるけれど、話し言葉的です。「額田郡」というのは愛知県に実際にある奥三河の郡。「にんじん村」は、私が作ったんです。

穂村 両方現実ではなく、また「かほちや郡にんじん村」でもない。

岡井 実際に、車を駆つてある人に逢いに行つたんだよね。ある人は誰か、なんてことは今言いませんけれど。逢いに行つただけで、どうしても「今日は逢わないで帰つたほうがいいかな」と。そういうことつてあるじゃないですか。人間心理の中でいけば面白い。やりたいことをやろうとしてやれないというマイナスの、その柔らかい感じとこのを、それまであまり歌にしていなかった。

「にんじん村」という架空の村を作った。この辺から、ちよつと歌を楽しんでるのかな。

穂村 見ようによつては、かわいい歌ともとれるような優しい世界ですよ。違いたくて来たのに逢わないで帰ったという、セクシーさみたいなそういうものを、この辺で我々読者はすごく感じるようになった。岡井さんの年齢で言うくと六十代ですね。

岡井 そうですね。

料理やファッションは嫌手な題材

穂村 『親和力』は六十一歳のときの歌集、『神の仕事場』は六十六歳。五年後の歌集ですが、その中の歌です。

嗚呼^あ迷^あふ迷^あへとことん迷^あひ抜けレモン
をしぼるその時の間も

これは、日常生活の中でしょつちゅう思い出して「岡井さんもこんなに迷うんだから、迷っているんだ」と、自分を励ますのによく唱える歌なんです。「嗚呼迷ふ迷へとことん

迷ひ抜け」、レモンは秋刀魚に搾っているのか牡蠣に搾っているのかわかりませんが、食事のときにレモンを搾るその時の間も迷っている。こんなんじゃないかなかったですよね？ 前期岡井隆は、突然、迷いが前面に出る。

岡井 「迷ふ、迷へ、迷ひ抜け」と、迷うが三回出てくる。そして下の句で途端に「レモンをしぼる」と。食事関係、あるいは食物関係、料理関係は、私が最大の苦手とする二つのものの一つです。もう一つはファッション。若いときから本当に苦手でした。この辺りから誰の真似だか知らないけど、こんな歌を出しちゃってね。自分のいちばん不得意な面です……。

穂村 『伊太利亜』という歌集の歌です。これは面白いですね。

なんだか、／なんだか／つても／かな
しいんだ／サン・マルコ広場の人／鳩ま
みれ

岡井 ベネチアですね。

穂村 僕も行ったことがあります。鳩がいっぱいいる広場ですが、鳩まみれの人がいいたん

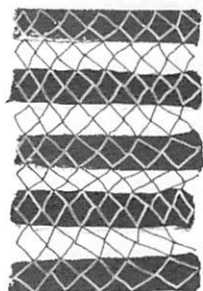
ですか？

岡井 そう（笑）、鳩まみれなんだ、みんな。向こうの鳩は人間を全然怖がらないから。

穂村 この「なんだか、／なんだか／つても／かなしいんだ」という辺りが昔の岡井さんでは考えられないような韻律であり、表記であり……。

岡井 本当だねえ、そう言われてみればそう

だ。
穂村 これは多行書きですね。／が入っているところで行が変わっている。だから、一方では実験的なことをやっているのだと思います。「迷いはじめて、／つてもかなしいんだ」と弱音を吐くようになった岡井さんの作品世界の変化がある中で、きらめくように幸福な、文句なく幸福なテーマというのがこの辺りから出現し始めます。



風貌も変ってゆく

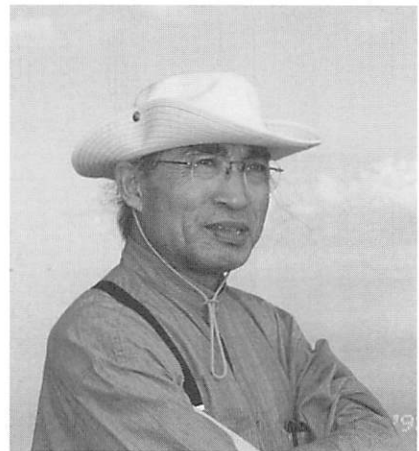
穂村 『E/T』という歌集があります。

食卓のむかうは若き妻の川ふしぎな魚の釣り上げらるる

この『E/T』がどんな意味なのか、当時みんなの話題になっていました。「エロスとタナトスじゃないか」とか、「いや、これは恵理子と隆のイニシヤルなんだ」とか。恵理子というのは奥様の名前です。「エロス／タナトス」と「恵理子／隆」ではえらい違いだけれど、両方がかかっているんじゃないかとか、論議を呼んだタイトルですね。どうなんですか？ 真相は。

岡井 いやあ、どうなんですかね。まあ、自分たちの名前を載つけて歌集を作るというのはあまりにも凶々しいわけですし、読者に失礼なわけですから、多分「エロスとタナトス」だったんだろうと。この歌集には、穂村さんも一緒にやっていた「乱詩の会」のとき

の作品がたくさん入っています。「乱詩の会」というのは歌人、俳人、詩人、小説家、評論家など二十人くらいが、毎月、「今日は短歌」「今日は俳句」「今日は漢詩」「今日はソネット―十四行詩」と作りあって、ワイワイやっていた。たまたま彼女と一緒にあってあまり時間が経っていなかったということももちろんあるけれど、今の自分の気持ちというのはどうなんだろうと思って、こういう歌を作ってみたんです。「妻の川」あるいは「ふしぎな魚」、これはみんな比喻です。向こう側に家内がいて、こちら側に自分がいる。ご飯を食べていろいろ話していると、向こうには全然別の川が流れているみたい。そこで向こうに見える女の人は、自分の前だけを流れている川から一匹魚を釣って、それについてなんだか不思議な話をしている。こちらと向こうとが、ある気持ちにおいて繋がっているにも関わらず、まったく別の世界に住んでいる。別の世界に住んでいること自身がこちらの喜びであるというようなことを言うために「川」とか「魚」とか、これはもちろん縁語ですけれど。こういうことをこの頃、一所懸命にやっていただね。



穂村 これは、すごく甘い。眩しいような甘さのある歌ですよ。

岡井 よくぞこんなことを人の前で言うわというくらい、恥ずかしいね(笑)。

穂村 そこが岡井さんのすごいところです。岡井さんが迷い始めた頃の昔の写真があります。言葉だけじゃなくて、岡井さんの風貌にも目が釘付けになってしまっただけです。僕が岡井さんの年齢になっても、絶対にこんな立派な顔にはならないだろうな、と思うんです。

岡井 ひどい写真じゃないですか。

穂村 九三年です。悪い感じが残っていますね。今のほうがかっこいいです(笑)。

岡井 そうそう、悪者のほうが残ってる。二十年前から、六十代の半ばですか。

穂村 この頃から、迷うとか弱音を吐く魅力ある歌が増えてきました。なんなんでしょうね。どれだけ自分が文学的な踏絵を目の前に置かれて問われたか、みたいなことが、風貌にも言葉にも出るなと思います。

「死と隣り合わせ」のところから

穂村 『家常茶飯』のこの歌は、強かった時代を回顧している近作です。

青き菊をちぎりつつわたしを待つなんて出来まいわたしはあないのだから

これは、本歌取りというか返歌ですね。元歌は、かつて岡井さんが歌壇から失踪されたことがあって、その時に塚本さんが詠まれた〈青き菊の主題をおきて待つわれにかへり来よ海の底まで秋〉という、とても有名な歌です。その何十年後の返歌がこの歌だと思おうですけれど。

岡井 「出来まいわたしはあないのだから」というのはどのような感じのだけけれど、本気になって言っているんだよね。塚本さん、あなたは「待ってるよ」とおっしゃるけれど、私という存在はもうこの世にいないのだからと。失踪したとか軽い意味じゃなくて、完全に、本当にいない。つまり、普通だと死んでしまっていると言えるような、無の世界に入っているんだから、いくら待ったって私なんか来やしないんだよ、という返事を突きつけたかったわけです。

塚本さんは、こちらが本気になって出て行くくと、本気になって返事をくれる人です。たくさんの岡井隆論、あるいは岡井隆の歌集についての解説、そして一首で僕に伝えるということをやってくれる。こういうかけがえのない友人をこの世の中で持ったということ

は、僕にとつて最大の幸せだろうね。

穂村 『銀色の馬の鬣』がいちばん新しい歌集ですね。そこでは恐ろしい試みがされていると私は思っていて、例えばこんな怖い歌があります。

この部屋から本がごとく消え去る
日意外に早からうぜ 雪降る

「この部屋から本がごとく消え去る日」が暗示しているのは、つまり作中の私が死ぬ日という意味だと思っただけですね。自分が死ぬということをもっと向からテーマにして、しかもそれが「意外に早からうぜ」と。こんなことを言われたら、読者はドキドキしてこの歌に引きつけられる。

岡井 そうですね。私自身のことを話すのは本当はまずいんだけど、去年二月七日に健康を害しましてね。いろいろな仕事を辞めたんです。十一月の終わりに鼠径ヘルニアの手術をやりました。僕自身ドクターだったことがあるから、こういう病気はこうだとか、手術はこうだということがある程度わかるんだね。自分はかなり死と隣り合わせのところにいるんだな、隣り合わせどころか明日もわからない感じかな、と。そう思ったときに、こういう歌ができた。すごく正直な歌で、極端なことを言っているように見えるけれど僕にとつては日常詠だね。

穂村 「早からうぜ」という言い回しに、た

まらなく魅力があるんです。究極の弱さですよね、死に直面するというのは。そこで、かつての強い岡井隆が一瞬よみがえる。「意外と早からうぜ」というのは、強さのような、死に抗うような感覚。そして「雪降る」と。この歌は忘れがたい、衝撃的な一首です。

夜の蟬しんしんと啼くかたはらを妻と
われゆくゴミを抱へて

まったくの日常詠のように見えるけど、同じ歌集の中で見ると「夜の蟬がしんしんと啼く」というのは、つまり時間ですよ。蟬は長く生きるものじゃない。最近、東京などは、夜の間も焦ったように啼き続けている。その傍らと奥様と、岡井さんはゴミを抱えて？

岡井 ええ、もう毎晩。えらいねえ、家事の手伝いをして、なんて思ったら大間違い。部屋から下まで下りていくことで、足を鍛えているんですよ、一所懸命に（笑）。

穂村 この「ゴミを抱へて」というところがなんともいいんですよ。不思議ですね。もったいい物を抱えるよりも、ゴミを抱えている

から、すごく愛のある感じがする。

岡井 そうですか。

穂村 でも、それはわかってやっているんでしよう、岡井さん。金庫とかを抱えるんじゃないめなんだと。さらっと詠われているように見えますけどなんとも胸を打つ歌です。

岡井さんが、これは触れたいという歌はありますか？

岡井 僕の最近の歌ですが。

つきの光に花梨くわりんが青く垂れてゐる。ず
るいなあ先に時が満ちてて

この「時」というのは、実はバイブルに出でくる「時」なので、「時が満ちる」というのはキリストの死、あるいはキリストの復活を普通は言っている。だけど、何もそんなところまで言う必要はない。時間というものはずっと経っていて、あるところでそれが満ちたからこそ、花梨の実が青く垂れている。「なんだ、お前さん、花梨という木は俺よりも先に自分の時間というものを完結させて青い実を垂らしているじゃないか。私はまだ、そこまでいっていないんだよ。ずるいなあ、

お前さん」と。でも普通はこれはどう解釈されるんでしょう。

穂村 僕が真っ先に思ったのは、この歌はさつきの「蒼穹」の歌と構造がよく似ているということ。上の句で青いものが出てきて、そして下の句で時、時間についての考えが詠われる。「わがしづけき伴侶」からここまで数十年あるわけで、岡井さんの中で、変わっていない感覚と、変化した部分とがあるという、そこがとても面白いと思いました。

岡井 しかも、どちらも時だね。時間だね。やっぱり、そうは簡単に抜け出られないんだ。あのパターンから（笑）。

穂村 思潮社から出ている『岡井隆歌集』という薄い本があります。岡井さんの全部の歌の中から黒瀬珂瀾さんが選んだ二二〇首ほどが入っています。その最後に、大辻隆弘さん、吉本隆明さん、斉藤斎藤さんなどが「岡井隆論」を書いていきます。それをお読みになると、これらの歌についての内容や読み方がわかると思いますので、本屋の回し者じゃありませんけれど、ぜひ、お読みください。

岡井 ありがとうございます。